

実践記録（小6・学活）

1 ねらい

付箋紙を使い、対話的な学びとしての意見交流を行うことによって、新たな意見を自分の考えに取り入れ、自分の考えを深めることができるようにする。

2 手立て

自分の考えをもつための工夫

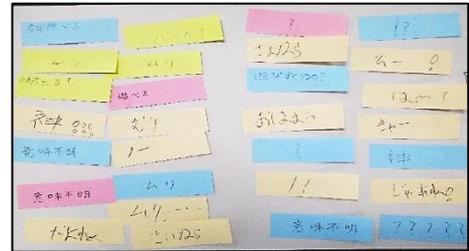
自分の考えをもちやすくするために、擬似的なメール体験を行う。本実践では、付箋紙を用いて返信が早いメール体験と遅いメール体験を行うことで、それぞれの特性や違いについて気づき、自分の考えを明確にすることができるように考える。

付箋紙を用いた交流活動

疑似体験を通してもった自分の考えを友達と交流する際に付箋紙を用いた意見交流を行う。そうすることで、多様な意見にふれることができたり、付箋紙を線でつなげることで思考の流れを可視化することができたりすると考える。

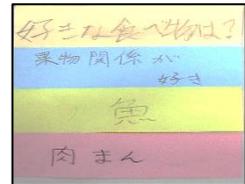
3 実践の様子

日常的にメールをやりとりしている子どもたちの意見を基に、「メールの返信は早いほうがよいだろうか。遅くてもよいだろうか。」という課題を設定し、意見を交流させることにした。メールの返信は早い方がよいと答える子どもが17名、遅くてもよいと答える子どもが8名であった。



【返信が早いメールのやりとりをした様子】

そこで、早いメールのやりとりと遅いメールのやりとりをそれぞれ体験させた。早いやりとりでは制限時間を10秒以内に返信をする。遅いやりとりでは1分たった後に返信するように指示をした。感想を聞いてみると、返信が早いメールのやりとりでは、「テンポ良く会話ができやすい。」や「次々にメールが来るので返す側が言葉に迷って大変だった。」などの意見が聞かれた。返信が遅いメールのやりとりでは、「返事の内容をしっかりと考えることができた。」や「待っている間にいらいらしてしまう。」などの意見が聞かれ、返信が早い場合と遅い場合に、それぞれメールのやりとりをする相手がどのように思っているのか感じることができた。



【返信が遅いメールのやりとりをした様子】

次に、メールの返信は早いほうがよいか、遅くてもよいか、というテーマについて付箋紙を用いて意見交流を行った。「早いほうが何度もやりとりができて楽しい」という意見に対して「ゆっくりの方が焦らなくて済むからよい」などの意見が出され、活発な意見交流が行われた。

最後にメールの返信はどのようにしたらよいかについて考えさせた。互いの意見の中から、自分の都合を優先させる内容を取り上げ、それが相手の迷惑になることに気付かせた。早いほうがよいと考えていた子どもも、相手が困ってしまうので遅くてもよいという新たな考えをもつことができたり、自分の都合だけでなく、受け取る人の気持ちを踏まえて考えたりすることができた。

4 成果と課題

- 「メールの返信は早いほうがよいか、遅くてもよいか」というテーマで疑似体験を行わせたことで、子どもは意見が出しやすかった。
- 対話の途中で新しい資料を提示するなどして、子どもの考えをゆさぶる場面をつくるとよかったと感じた。